

マメトラ農機株式会社

マメトラ農機株式会社は戦後まもなく誕生した小型農機具メーカーの名門として知られている。社名のマメトラは、“マメに働く農家の虎の子”のキャッチコピーを意味し、農家にとってかけがえのない大切な機械（財産）を届けたいという思いから、丈夫で長持ちをするモノづくりにこだわり続けてきた。戦後、日本の農業と共に歩んできた同社は、これからも農家に寄り添いながら支持される製品づくりに取り組んでいく。

細田康社長の父 細田昇が 初代社長として就任

マメトラ農機株式会社は1947年4月創業の農機具メーカーで、細田康社長の祖母、細田さと氏が前身の株式会社太田特殊鋼管（所沢市）の新規事業として立ち上げたのが始まりだ。太田特殊鋼管は1932年創業で主に航空機部品を手掛けていた会社で、戦中は陸軍航空本部の指定工場として、終戦まで軍需工場として役割を果たしていた。終戦を迎えて、何か新しい仕事はないかと模索する中、辿り着いたのが農作業用の機械であった。当時の日本は食糧増産が求められていたが、農作業は過酷で重労働な仕事であった。当時の太田特殊鋼管の社長、太田精一郎氏はこの分野に機

械を投入することで、農家を手助けできるのではないかという発想から農機具に着目した。

同社は早速、農家の困りごとやニーズ調査に着手した。すると、多くの農家で家畜を利用した“土上げ機”という道具を使っていることが分かった。土上げ機とは、牛などの家畜にスキを付けて引っ張らせる道具の事で、青森県にある佐々木農機株式会社（現、ササキコーポレーション）が製造していた。当時、戦勝国のアメリカでは、家畜にスキを引かせる代わりにエンジンを搭載した「テラー」と呼ばれる耕運機が農作業に使われていた。太田社長は“いいエンジンさえあれば、我々にも耕運機が出来るのではないか”と、その機械の試作を実甥、細田昇氏に依頼する。昇は早速、試作機の製作に取り掛かる。そして、1947年、社内で農作業器具を扱う部署を立ち上げ、本格的に耕運機の開発に乗り出しこの事業に生涯をかけることとなった。

試行錯誤の末、1953年、株式会社太田機械（1950年に太田特殊鋼管から社名変更）は国内初の耕運機を開発、“マメトラ”というブランドで発売した。エンジンは外部の専門メーカーから調達することを決め、初の製品には本田技研工業株式会社の空



マメトラの礎を築いた細田さと氏と細田昇初代社長

冷式エンジンを採用した。当時、太田機械にはまだ本格的な生産設備はなく、同社は佐々木農機と生産、販売契約を結び、マメトラを世に出した。いまで言う“ファブレス（工場を持たない）メーカー”に近い存在であった。その後、1958年業務拡大に伴い社名をマメトラ農機株式会社に変更した。同時に関東を中心に全国主要都市に営業所を開設し活発な営業活動に向けて動き出した。その後、所沢の工場が狭隘の為、近代工場に脱皮すべく桶川市の現所に新工場建設を開始した。

地道な啓発活動で耕運機を広めていく

1963年に桶川市に移転し、心機一転して事業に乗り出したものの、当初は商品の販売は容易でなかった。1958年に佐々木農機からマメトラの生産及び販売業務を引き継いだ際、関東を中心に全国主要都市に営業所を開設し活発な営業活動に入っていたが、当時、まだ農家に耕運機は馴染みがなかった。まず、存在を知って貰わなければならないと、社内に実演部隊を組織し、営業マンが全国各地を飛び回り、必要に応じて実演講習会を開催する日々が続いた。

それまでは家畜にスキを引かせて土地を耕していたものを、農家が自らエンジン付きの機械を手で押しながら農作業する。それは、農家に意識改革を促すだけではなく、必要な技能が求められた。耕運機の基本はオートバイの原理と同じで、ミッション（変速機）が付いた機械を手元でクラッチ操作する。そのため講習会は操縦法の技術研修さながらの様であった。但し、オートバイとの決定的な違いは、オートバイは道路を走るのに対して、耕運機は土の中で動かす。しかも、泥だらけの土の中で機械を反転させるのは、かなりの技が求められた。例えば、直進時にはエンジンを3,000回転ぐらいにまで上げるが、反転する際には減速が必要で、ミッションを操作



創業当時のマメトラ農機 桶川工場

しながら50-60回転まで落とさなければならぬ。使い手に相当の技量が求められたが、それでも、地道な啓蒙活動と実演講習会によって、次第に農家の間に“マメトラ”ブランドは浸透していった。また1974年には秋田県は鳥海山の麓にかほ市秋田工場を設立。ヨーロッパ各国特にフランス、ベルギーを中心に輸出が急増し輸出用小型農機を量産した。

小型分野に特化した機械を開発

マメトラ農機のHPを開くと、“小型農機の名門”という文字が飛び込んでくる。そのコピー通り、同社は創業から一貫して小型農機具の開発に徹してきた。何故なのか？その理由について細田社長は、「農家が無理なく買える機械を作って提供したいという考えに基づいてのものだった」と明かす。戦後、稲作、畑作いずれの作物を手掛ける農家も、生産性は高くなかった。過酷な重労働から解放はされたいが、さりとして農家が畑や田んぼを自分で耕すのに、高価な機械を買うことは躊躇された。そこでマメトラ農機は、農家が家畜を売って買える機械の金額を10万円と想定し、「その金額の範囲内で、農家にとって本当に一番いい機械の開発に特化した」（細田社長）。

同社のビジネスモデルは、駆動源のエンジンは外部から購入し、それに農家の生産品目や農作業の条件に合わせて最適な作業装備をアタッチメントの形で製造、装着して販売し



商談会風景

ている。次々と新しい機械を開発して、生産性をどんどん上げていくという発想ではなく、あくまでも農家の手助けになる良い製品を開発して提供することに長年、経営の主眼を置いてきた。その理念は、社名やブランドネームでもある“マメトラ”に込められている。マメトラとは、“マメに働く農家の虎（トラ）の子”を意味しているが、同社の機械が農家にとって自分の財産、虎の子なんだという願いが込められている。大切な機械がすぐ

に壊れたり、年数が経過して使えなくなること避けるため、同社は耐久性に優れた丈夫な製品づくりにこだわってきた。細田社長は、「もしも、畑の中で壊れたり、動かなくなったりすると大変なことになる。そうした事に対する配慮や思いやりが、創業時から脈々と受け継がれている」と話す。

ラインナップの数だけ支持層が広がる

現在、マメトラ農機が扱う製品は約80種類に及ぶ。例えば、人が押しながら使う歩行用の田植え機は、1965年に業界に先駆けて同社が製品化したものだ。現在、一般的に使われている乗用の田植え機も、同社が発案した歩行用の田植え機の原理やアイデアが数多く参考にされている。また、ロングセラー製品の1つに「リターンカルチ」という機械がある。養蚕農家向けに開発された機械で、蚕に桑の葉を食べさせた後の残桑を抜く作業に使われ、リターン作業ができるのが特徴だ。

同社の製品はその9割が、人間が押しながら操作して動かす機械だが、中には乗用タイプの製品もある。その1つがベストセラーとも言える乗用ネギ土寄せ専用機「MSR-950」だ。ネギ農家向けに開発された製品で、人が乗って畝立てから刈り取りまで、一連の作業を全



ハンマーナイフモア シリーズ



ネギスコッパー シリーズ

て行う。開発当初は草取り機としての利用を念頭にしていたが、同機はアタッチメントを交換せずに多用途に使うことができるため、いつの間にか、ネギ農家がネギの泥上げに使うようになった。収穫時、ネギは白い部分が土にかぶってるが、最初は小さいネギの畝を土の上に置いて、鍬で土をかぶせて白と青のネギに育てていく。「MSR-950」はその土を被せる作業を行う機械としてネギ農家の支持を集めている。

農家のニーズをきめ細かく製品開発に吸い上げたことが、現在のラインナップに反映され、幅広く支持を集めている。マメトラ農機の製品は耐久性に優れているため、農家が長年、使用していると愛着が出てくる。そのため、製品を買い替えずにもう1台、2台と追加で買うユーザーも少なくないという。同じ機械でも、これは菜っ葉用とか小麦用とか用途別に購入している。製品がユーザーから愛されている証であり、メーカーとしてはこれ以上の喜びはないだろう。

農家が望む製品を作り続けていく

少子高齢化が進む日本では、幅広い産業で人手不足が続いている。農業分野も例外ではない。特に農業では後継者不足の問題から高

齢化が顕著に進んでいる。そのため、止む無く廃業を選択する農家も少なくなく、農家戸数は全国的に減少傾向にある。農業市場を商売にする農機具メーカーにとっても縮小する市場で今後、どう事業を継続、発展していくのか課題だ。マメトラ農機の場合、取り扱う製品には野菜農家向けのものが多く、幸いにも野菜生産農家の件数は横ばいが続いている。細田社長は「ありがたい」と感謝の気持ちを表すと同時に、「最近では野菜関係の農機がクローズアップされてきている。野菜農家向けに1台でも2台でも新しい機械を作って提供していきたいと考えている」(同) と話す。

また、マメトラ農機ではこれまでの国内市場に加えて、現在、積極的に海外市場への売り込みも進めている。これまでも韓国や台湾向けに輸出実績があるが、いま新たにインドネシアやフランスといった市場開拓にもチャレンジしている。

現在、国内には小型農機具メーカーが10社以上存在している。各メーカーともマメトラ農機と同様の製品を開発し販売している。競争環境は激しいが、細田社長は「常にどうしたら競争に負けないのか考えている。結局は農家が望む農機具を作り続けることが、やはり一番大切だ」と話す。今後のますますの活躍が期待されている。

企業概要 マメトラ農機株式会社

<http://www.mametora.co.jp/>

代表取締役社長：細田 康
創業：1947年4月
事業内容：農業機械の製造および卸
本社：埼玉県桶川市西2-9-37
電話番号：048-771-1181
取引店：桶川支店

